

赤ちゃんの頭頂部

触ってみれば分かるが、頭というのは、あちこち、少しは凸凹つぼみしているものだ。知らないでいると、大騒ぎの元になる。

患者さんは、生後のヶ月の女の子。床におでこをぶつけ、すぐに泣いた。右の前額部に擦過傷がみられる。でも、顔色は普通で、機嫌は良い。

だが、お母さんのほうが尋常ではない。ベッドから落ちたのか、落としてしまったのかはどうでもよい。が、落下した高さを聞いてもあやふやである。で、赤ちゃんの頭のてっぺんを指さして固まっている。

「センセ。ほら、ここが凹へこんでいる。陥没骨折では？」と、今にも失神しそつなのである。

なんのことはない。それは、抱っこされた状態では、凹へこんでいるのが正常な「大泉門たいせんもん」ではないか。

実は、どの赤ちゃんにも、頭のてっぺんの前後に、大泉門、小泉門という凹みがある。それぞれ、前頭骨と頭頂骨、頭頂骨と後頭骨の接合部で、骨がなく柔らかい。

産道を出てくる時や、脳の発育過程に必要となる頭蓋骨のゆとの部分と思えばよい。放っておいても、小泉門は生後2〜3ヶ月で、大泉門は1歳半くらいで閉じてしまう。

閉じるまでの、ことに大泉門は、もの言わぬ赤ちゃんの頭蓋内の状態をよく教えてくれる。頭の中に出血や脳挫傷ができて脳の圧が高くなった時に、大泉門は膨隆うふりゅうして、触ると硬くなっている。だから、赤ちゃんが頭をぶつけていても、大泉門が凹んでいることが分ければ、ワッシーらは、まず、ほっとするのである。

ならば、お母さんたちも、普段から大泉門をよく触っておいたほうが良いのではないか。寝ている時、カんだ時。抱いている時、泣いている時、それは、いろいろな変化する。そのことを知っていれば、いざという時に役に立つ。が、もちろん、その時がないほうが良いに決まっている。

(石黒修三＝いしほろクリニック・脳神経

外科医…6/27北國新聞掲載)